

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	秋保 亘
<p>主論文題名：</p> <p style="text-align: center;">本質と実在—スピノザ形而上学の生成とその展開—</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p>本論文はスピノザ形而上学の生成とその展開を、本質と実在という形而上学の枢要概念に分析の焦点を当てつつ描き出すことを中心課題とする。</p> <p>これまでのスピノザ研究史上、解釈者たちのあいだには、スピノザ哲学の解釈にとって根本的なことならにおいてさえ、様々な議論の紛糾と不一致が存する。これらのなかで本論文が扱うのは、スピノザの初期著作である『神、人間、および人間の幸福にかんする短論文』（以下『短論文』と略記）と『知性改善論』（以下『改善論』と略記）を、主著『エチカ』に結実する彼の哲学的思索の行程のうちでいかに位置づけるか、そして『エチカ』で提示される諸定義がどのような機能・身分を有しているのか、また『エチカ』における原因性の理解と、論理的な帰結としての「特質」ともの[<i>res</i>]として産出される「結果」という身分を持つ様態がいかに連関するののかという問い、さらには個別的なものの位置づけ、その有限性と永遠性の共 - 存立についての問いである。これらの問いはすべて本質と実在の問題に収斂すると思われる、この問題こそがスピノザ形而上学の理解に向けての導きの糸たりうると思われる問題である。</p> <p>序論においてはスピノザの初期著作とされる『短論文』と『改善論』がはらむテキスト成立上の問題をとりあげ、スピノザ形而上学の成立の出発点をどちらに定めるべきかを検討する。従来の研究では、『短論文』が先に成立し、『改善論』がそののちに執筆されたとみなされていたが、1980年前後からの F. Mignini の一連の研究により、これら両作品の成立順序を逆転させるという仮説が提起された。この Mignini の諸研究が提示する諸論点を検討したうえで私たちは、両作品の成立時期、成立順序の確定がなおも困難な問題としてとどまるということを示し、さらに現在私たちが手にしている『短論文』のテキストが、スピノザその人によって書かれたものとは断定できないと思われ、未完のままに残されたとはいえ、スピノザ自身によって書かれた『改善論』にこそ、スピノザ形而上学の生成についての考察の出発点を定めるべきである由を示した。</p> <p>第1章では、『改善論』における「確実性」の問題を分析することで、当該テキストで展開されるスピノザの思想に多層性が見出され、これがまた『改善論』の執筆時期の多層性にもつながりうるとの仮説を提示し、この著作がはらむ哲学的な問題を浮き彫りにすることで、スピノザ形而上学の生成を促した原初的場面を捉えようとした。</p> <p>『改善論』の冒頭部はしばしばスピノザ哲学全体の「序曲」ともみなされ、そこではスピノザ形而上学そのもののもくろみが開示されていると考えられる。スピノザはまず「確実なもの」についての言及から論述を出発させるが、私たちはこの冒頭部からスピノザ哲学を貫くモチーフとして次のものを取りだした。不確実なものにみちあふれ、定めがたき</p>			

この世でもなおその本性上確実な何ものか、「精神が全自然ととりもつ合一性の認識」へと至る手段となるものをいかにみいだして手に入れるか、「それをみいだし獲得することによって、永続する最高の喜びを私が永遠に享受することになるもの」を探求するということ、これである。

『改善論』における確実性の内実にかんしてスピノザは、「確実性は対象的本質それ自身以外の何ものでもなく、「私たちが形相的本質を感受するその様式が確実性そのものである」という。これはつまり、認識の対象の本質が現に認識されてある以外の仕方ではありえない、別様ではありえないという点に確実性が求められているのだと考えられる。ところがスピノザはこの著作において自らの示したこのような確実性理解と明らかに齟齬をきたすことがらをも述べており、加えてこのテキストの終盤では、確実性にかんして枢要な役割を担わされていた「対象的本質」という概念が消失していく。さらに彼は確実性が語られるゆえんである、対象の本質を別様ではありえないという仕方ではありえないという点に確実性が求められているのだと考えられる。この根拠の説明は『エチカ』に引き渡されると考えられる。

第2章では、『改善論』におけるものの本質と実在にかんするスピノザの議論が理論上の問題を抱えており、第1章でみた「確実性」の問題も、この本質と実在の問題というより大きな問題の一部であることを示し、スピノザ形而上学の生成点を見定める。『改善論』においてスピノザは、人間の生や幸福について探求するという彼の倫理的志向に則り、自然のうちなる具体的・個別的なものの個別的な実在を求めようとする。ここでは、抽象作業を経て個別性をはぎとられた「一般的な実在」といった抽象普遍概念によらず、その個別特殊性において実在を捉えることが主眼とされていると考えられる。そのさい当のものの本質の側も、その個別特殊性においてねらわれることになる。さらにスピノザのもくろみとしては、「いまだ認識されざる諸々のもの」、つまり未知の対象にかんしてもなおその本質と実在を個別特殊性において捉えることが挙げられる。ところが、『改善論』の本質と実在にかんする議論を追っていくと、次のような複数の問題点がみいだされる。1)実在の多義性。つまり「実在」ということばが、外的原因によって規定される実在、「永遠真理」とはいわれえない実在と、「それ自身によって永遠真理である」必然的実在というまったくことなる二つの意味を有しており、しかもこれら二つの実在のあいだには埋めることのできない断絶がある。2)本質の優位。スピノザは『改善論』において、本質一般を永遠真理とみなしていると考えられ、さらに外的原因によって産出される実在、つまり或る個別的なものの個別的な実在を理解するには、当のものの永遠真理としての本質が、何よりも先に認識されなければならないとみなしていると理解できる。加えてスピノザはこうした個別的なものの実在と、永遠真理とみなされるべき本質が、「何の連関も持たない」と明言しており、先に密接に呼応すべきものとみなされた個別的なものの本質と実在がはっきりと分断されるに至る。さらに3)個別的なものの実在の条件と考えられる「自然の順序」という概念を検討してみても、結局のところ個別的なものの本質と実在の統一的把握がきわめて危ういものとなっているといわざるをえないのである。

ところで、個別的なものの本質、その個別特殊性はいかにして捉えられうるのか。この点にかんしてスピノザはA)定義論とB)諸観念の順序付けという論点を提示しており、後者はさらに「確固永遠たるもの」という、スピノザ解釈史上の争点のひとつとなっている概念に結び付けられる。しかしながらこれら二点にかんしても『改善論』におけるスピノザの議論には困難が含まれている。第3章はこの理論的困難を指摘し、スピノザ形而上学の生成を描き出すことを試みる。

A)『改善論』の定義論は、スピノザの全著作のなかでもっとも詳細に定義についての議論を行っているテキストであり、『エチカ』における諸定義の身分・機能の解釈にかんして頻繁に参照される箇所であるが、私たちはこの定義論が理論的困難を抱えており、この問題こそが『改善論』の未完の理由となったという仮説を提示する。つまりスピノザは或るものの個別特殊的本質を求めるというもくろみのもとで定義論を展開していくのだが、結局のところ『改善論』全体をとおして、こうした定義の具体的作成法が明示されることはなかった。さらにこの定義論には明らかな論理的循環がみだされる。つまり、先にみたようにスピノザは未知の対象の本質を、探究されるべきものとして提示し、この探求のために用いられるものとして定義を与えようとするのだが、彼はこの本質が先に認識されなければ、当の対象の定義を立てることができないと語るのである。B)スピノザによれば、自然のうちに実在するすべての個別的なものは、一定の法則にしたがった原因 - 結果の産出関係、自然の順序によって条件づけられている。そしてこの法則は「確固永遠たるもの」に書き込まれているという。この概念は個別的なものの本質と実在が、ともに認識論的にも存在論的にも全面的に依拠しなければならない形而上学的原理として提示されていると考えられるが、『改善論』では結局のところこの概念の内実が明確には示されていないといわなければならない。しかしこの概念が示すスピノザ哲学のもくろみとして、ものの本質と実在を包括的に説明し基礎づける存在論の要請をみいだすことができ、私たちはまさにこの点にスピノザ形而上学の生成を見届ける。

『エチカ』冒頭の議論はかくてこうした要請を実現すべく、およそ在るものの全領域を尽くす実体の実在とその本質の同一性を、定義を出発点とした一連の論証を介して、それ以外ではありえないという必然性のもとで確立し、これでもって真理の領野を認識論的かつ存在論的に基礎づけるところがねらわれていると考えられる。

私たちは『エチカ』冒頭部における定義の身分と機能を以下のように解釈する。従来の多くの解釈にみられるように、定義はのっけから定義対象の本質を定め、真理にかかわるものとして提示されているのではない。そうではなく、被定義項の本質が導出されるために最も有効と考えられる〈導出の出発点となる定義〉と、論証の手続きを経ることではじめて確立される被定義項の〈本質〉とを明確に区別する必要があると考える。そして冒頭の定義の機能とは、被定義項の概念を、その概念領野の全体ではないにせよ、一義的に定め、それ以外の語義を前提とせず、また当の概念に付きまっていた問題性を排除し、それをを用いた後続する論証を介して徐々に、そして新たに被定義項の本質を確定させていき、ことばとしては同じ語彙を保持しつつも、全体として既存の意味を改変するという点に存する。さらに『エチカ』冒頭の議論が真理にかかわっていくのは、こうした機能を有する定義を用いた一連の論証により、別様ではありえないという必然

性の様相のもとで、実在の全領野を尽くす実体の実在とその本質との同一性を示し、さらにこれらが永遠真理とみなされなければならないということを承認させることで、実体の実在、本質、真理の同一性をも肯定することによってであると考えられる。かくて定められた真理の基盤から出発して、いかに個別的なものの実在と本質が語られていくことになるのか。第4章はこの点を論じることで、スピノザ形而上学の展開を示していく。

先にみたように『改善論』においてスピノザは、個別的なものの実在と本質について、「確固永遠たるもの」にかかわる原因性の観点から説明を与えようとしていたのだが、『エチカ』においてもこの議論の方向性は保持されていると考えられ、まさに原因性こそが或るものの本質と実在を包括的に説明する装置となっている。スピノザは原因としての神=実体から、その結果としての「様態」が導出されていくという議論の出発点を画す定理において、「或るものの定義が与えられれば、知性はそこから多くの特質を導出する」という論点に立脚することで論証を進めている。この点にかんして、或るものの本質から多くの特質が（論理的に）帰結するということから、当のものが多数の結果を（ものとして）産出するということを導き出すことができるのか、またいかなる権利のもとで結果としての様態が論理的帰結とみなされる特質と等置されるのかという問題が、スピノザ研究史上提起されてきた。私たちはこの問題に応答することを視野におさめつつ、「神が自己原因であるといわれるその意味において、神はすべてのものの原因である」という『エチカ』の言明の解釈を軸にして議論を進める。まず自己原因にかんして次の二点の解釈を提示した。1)必然性の貫徹。本質と実在の必然的相即が実現されている実体=神が、自己原因であるということが論証によって定められる。したがって必然的に実在するものが、自己原因という名のもとで原因である以上、そこから何らかの結果が生じないということはありません。そしてこの必然性こそが、原因からの結果の産出と、三角形の本性からその三つの角が二直角に等しいということが帰結するという（論理的）帰結関係の必然性を結合させるものである。そして2)本質と実在の相即。自己原因であるもの（神=実体）の本質と実在の同一性が肯定された以上、本質と実在にかんする原因性はもはや別物ではない。つまり、実体=神はすべてのものの本質と実在双方の必然的原因となる。さらにこれに加えて第三に、力能概念との接続という論点が引き出される。神=実体が原因であるということが力能概念の内実としてつかまれることになる。加えて力能は、実在することの力、力能として措定されており、神=実体の実在する力能は、同時に原因として必然的に結果を産出する力能でもあることになり、自己原因としての神=実体の本質と実在が同一である以上、神の力能は神の本質そのものの、「活動的本質」である。本質そのものが実在することの力、力能として充溢した活動実現状態にある神、この神が必然的に結果を産出するのだから、この産出はたんなる論理的な必然性であるのみでなく、さらに現実的な実行力を有するものであると考えられる。かくて同一の必然性のもとに、本質・実在・力能の三者が統合されることになるのである。

終章では、これまでの議論を受けて『改善論』からの一貫したスピノザの倫理的志向に応じて、個別的なものの本質と実在がいかにして包括的に確固とした永遠なるものと連関づけられるのかを論究する。一方でスピノザは、個別的なものの有限な実在について語っている。これは神＝実体から産出される個別的なものが、単独で何らかのものの原因となるということがありえず、各々の個別的なものは、その多数性のもとですべて同時に原因でありかつ結果であるという相互的な因果関係に必然的に巻き込まれているということである。そしてまさにこの多数性と相互規定性こそが、個別的なものの有限性を定めるものである。しかし他方でスピノザは、このように有限な実在を有する個別的なものである私たちが、それでもなお「永遠である」とまで語っており、いかにしてこの有限性と永遠性が両立しうるのかという点が検討されなければならない。

スピノザは『エチカ』の或る箇所、有限であるといわれる実在と、「実在の本性そのもの」、「神のうちに在るかぎりでの個別的なものの実在そのもの」という二通りの実在について語っている。そしてこの後者の実在の理解については、神＝実体からの必然的原因性が重要な論点となる。たしかに個別的なものはその多数性と相互規定性により、有限であるといわれる実在を有する。しかし他方で個別的なものは、自らの存在論的基盤である神＝実体＝自然を原因とする、本質・実在・力能の三者が統合された活動実現状態である「実在することに固執する力」をも同時に与えられている。そしてこの必然的原因性の観点からものをとらえることこそが、「永遠の相のもとで」ものをとらえることに他ならない。そしてこうした二通りの実在は、まったく無関係で切り離されているというわけではない。スピノザがいうには、或るものを一定の時間と場所において実在するものと捉えることも、この同じものが神の本性から必然的に帰結するものであると捉えることも、ともに「現実的 actualis」なものとして当のものを捉えることであるという点において通底する。さらに、〈現実的に実在する〉ということは、この二通りの意味を包含する仕方で、「存在し、はたらきをなし、そして生きること」であると考えられる。私たちはかくて、以上のように理解することが、個別的なものの本質、実在、力能三者の統合を、「神の本性を介して永遠真理として」理解するということに他ならないということを経験する。ではこうした議論はスピノザの倫理的志向にいかに対応しているのだろうか。

この世界がいかにかに定めがたく変化しやすいものであるとしても、それでもなお私たちは現にいまここに実在する。そして現実的に実在していることは、まさに生きているということに他ならない。さらに、私たちの本質は実在に固執する力、神＝自然から必然的に産出される、私たち自身の本質・実在・力能三者の統合された活動実現状態に他ならない。かくて私たちが現に生きているということ、この事実と厳格に定位しつつ、かつ、現にいま生きているというこの現実を超えた保証を要求することなしに、その反対（現にいま実在しないということ）のありえないという必然性のもとで、この生を絶対的に肯定すること、スピノザの「エチカ」、倫理学は、まさにこの点を示すところにこそ存するのである。

Abstract of Thesis

Title: Essence and Existence – The Genesis of Spinoza’s Metaphysics and its Development

題目: 本質と実在—スピノザ形而上学の生成とその展開—

Author: Wataru AKIHO

The main subject of this thesis consists in describing the genesis and the development of Spinoza’s metaphysics by focusing on the concept of essence and existence. In this respect, we try to untangle some interpretative complications concerning the issues which are fundamental for the understanding of Spinoza’s philosophy: the positioning of his earlier work *Tractatus de Intellectus Emendatione* (hereafter *TIE*) with respect to his other works, the status and the function of definitions on which the demonstrations of *Ethica* are to be founded, the interpretation of the causality in *Ethica*, the relation between cause-effect and ground-consequence, and the problem of finitude of singular things and its eternity.

By comparing the circumstances and the establishment of Spinoza’s two earlier works, *Korte Verhandeling Van God de Mensch en deszelfs Welstand* and *TIE*, and by examining F. Mignini’s hypothesis on the chronology of these two works, we decide to take *TIE* as the start point of our description of the genesis of Spinoza’s metaphysics.

At the beginning of this text, we can find Spinoza’s ethical motif which seems to remain the case until his latest chief work *Ethica*: even in this unstable world filled with uncertain things, to try to find out something which would continuously give us, the singular things, the greatest joy for eternity. However, some theoretical problems are found there with regard to his theory of definition and to the causality concerning the existence and the essence of singular things, and we consider that this last problem stimulates the genesis of Spinoza’s metaphysics.

Through the first several demonstrations based on the definitions, the first part of *Ethica* establishes the identity of the essence, the existence and the power of the substance, i.e. God, which is to be considered as the ontological and the epistemological condition of all things. And then, through the causal efficacy which is nothing other than the efficacy of this God’s identity, the metaphysics of Spinoza develops the theory of production of singular things. The essence, the existence and the power of each singular thing are produced by the necessity of God’s nature. The conatus, the force by which each singular thing perseveres in existing, is nothing but the effectuation integrated with these three components of the ontological status of the singular things

under a species of necessity or eternity. What is to be lived or embodied through these highly speculative demonstrations, is a practice, an absolute affirmation of this our life with this our body.